
素晴らしき、自由な世界

虹さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素晴らしい、自由な世界

【著者名】

虹やん
麻村玲。

【あらすじ】

『他世界性物質論』という説を提唱した。十七歳の天才量子学者、

世界という現実の概念はいくつもあるとする『多重世界論』を裏付けるこの説に多くの注目が集まる。

しかし、理論だけであるとの説は多くの学者に否定された。

「自分の望んだ世界がそこにある」

そう思つた彼は、異世界に渡る決意をした。

もともと、空想的 세계에憧れていた玲は、なんでもできて、楽しい世界を望んだ。

着いた世界ではなんでもできた。一つのグループが争つていて、百度勝てば願いが叶う権利を得られるという。

戦い、友を得て、恋を知り、やがて世界の真実を知る。

翻弄され奔走し、成長していく。

青春系異能バトルファンタジー？！

プロローグ1（前書き）

初投稿、SJのサイト初心者の虹さんと申します。

稚拙な文章、誤字脱字などの至らぬ点は多々あることかと思いますが、読んでいただければ嬉しいです。

さて、作品についてですが、携帯からの投稿になりますから横書きで見にくいかと思います。

構成は工夫するつもりですが、そこはご容赦お願いします。

ストーリー 자체は、異能バトル系の話で、しかし、感動な話に仕上げたいと企んでいます（笑）ふふふ。日常的な掛け合いも楽しくしたいです。

読んでいただけるすべての方々に感謝し、頑張りたいです。

どうかよろしくお願ひします。

プロローグ1

冬。

寒さに凍えている街は、しかし、活気を失うことはない。

それはつまり人がいるということだ。

人々は、寒さに肩をすぼませ、追われるよつにそれぞれの道を急ぐ。クリスマスが近いためか、夜の街はネオンで明るく、着飾られていた。

「はあ……」

息を吐き出す。

白く濁つたそれは、すぐに個性のない色に変わってしまった。

繁華街を抜けると一気に人の気配が消えた。

自分を照らすのは僅かな月光ばかり。
街灯すら、ろくにありはしない。

私は街外れにある大学を目指していた。

脇にノートパソコンを抱え、誰もいない建物を見上げる。

近代の構造物らしく綺麗な外装をしていた。しかし、煌びやかさなどは欠片もなく、芸術性は皆無である。

馬鹿でかい校門は勿論、閉ざされている。

端にある関係者用の小さな扉へと歩を進めた。

警備員の詰め所には明かりが灯つており、中では夜勤の警備員が船を漕いでいた。

私の姿をみると、はっとした様子で軽く会釈をよこしてきた。

時間が時間なので最初は驚いた様子だったが、私だとわかると笑顔で扉を開けてくれた。

「忘れ物ですか？」

「ええ……そんなどひりで」

お礼を残し、その場を去ると、また誰もいない世界に一人投げ出された。

「あ、やあ、ひ。朝よ」

「……またか、なにか用事でもあるのか?」

心地のよい田原めとはあいならず、突然の来訪者によつて覚醒を余儀なくされた。

「私は寝が浅いんだ、用事もなく起こすのはやめてほし!」

「つれないなー。あたしだつて本当はこいやなんだよ?」

嫌ならばこなければいい。やつ言ぬつとするも、むんずと伸びてきた手に口を押されられて喋ることは許されなかつた。

「『ゆき、大好きだ。だから毎朝めしを作ってくれ』なんて言われたんだからくるつ起きやないつしょ」

手を払いのけ「なんだその頭の悪い台詞、誰がいつたんだ」と訂正してから、ベットに腰掛けてこちらを見る由紀の顔を揉む。

一敷由紀という女性はあどけなさの抜けきらない印象はあるが、大人らしい雰囲気もまとつてゐるといつ不思議な人物だ。

身長は自分よりも若干ひくいほどで、対した差はない。

髪は艶やかな黒。漆を塗つたかのような落ち着いた深い色だ。

その美しい、綿のように流れる長髪は風に揺られるだけで目を引か

れる。

切れ長の眉毛に田鼻立ちもくつきりとしていて、化粧もなしに素直に美しいと感じる端正な顔は、自然なままでも輝くダイアの原石ともいつたところか。

しばし、茫然と顔を眺めていた。そんな私を由紀は首を傾げて見返していく。

「なに?」

「いや、それでどうした」

「んふー、はいこれ」

ニコニコと不気味に笑いながら何かを差し出す。みれば茶封筒だ。特に変わった様子もなく、手に取ると中にはただ紙が入っていることが分かった。

「なにこれ」

「あなたのするべき」と書いてあります

「なるほど」

合点がいった。いつも思つことだが、口頭で言えぱいいものだ。

中身を確認すると、紙の中央にはじでかく『前線』と書かれていた。

私は視線を戻して今度は由紀を睨んだ。

常日頃1

「今回のミッションはいたつて単純。撃破数を競い合います」

「悪い、日本語で頼む」

「今回の任務はいたつて単純。撃破数を競い合います」

「わかつたぜーーー！」

メンバーの一人である上原光一は横文字がたいそう苦手であった。

いま居るのは、大学内の講堂。千人もの人数が同時にに入るほどの大ささであるが、たつたの十人しか使うことがない。

備え付けの椅子があり、各自座りたい場所に楽な姿勢で腰掛けていた。

二敷由紀は壇上でこちらを見下ろしながら、作戦の詳しい内容を説明している。

「あたしが指揮するA班は遊撃に回るわ。支援が目的なので無闇な交戦はせず、後方で連絡を待つこと」

どこからか引っ張ってきたホワイトボードに簡単な地図を描いて流れを解説していく。

私は事前に作戦内容を聞いていたので、確認程度に聞いていた。

書くのに使っていた水性ペンの蓋を閉じ、指先で器用にぐるり、と

回して服のポケットにしまいこむ。

ジャージに身を包んだ由紀はホワイトボードを力強く叩くと、高らかに宣言した。

「あたしらの願いを叶えるわよー！」

「」「」「」

闘をあげ、私達は立ち上がる。

常日頃 2

大きな川を挟んで、互いにテリトリーをもつチーム。西側にあるのが自分たちの陣地だ。

手に握った携帯電話を眺める。開戦は午前九時より。この大きな川の下流にある中洲。潮が満ちていたり、雨の日には姿を消してしまったが、今日は天気もよい。

ここが主な戦いの場所だ。

もう少し下った先にある海からは冷たい風が吹いてくる。私達を気にすることなく、風は気ままに戯れた。

緊張が段々と高まる中、私は考え方を集めていた。

戦いの前には毎回、こいつして思案にふける。

何故ならば、私がいまいる環境が異常だからだ。私自身、どうしてこのよつなことをしているのかがわからなかつた。

そうして、何故か対立する存在があり、戦っている。

願い事などなく、最もな理由もない。

常軌を逸した世界で、疑問を抱き、理由もなく他者を排斥する行為をしていた。

私が元いた所は違つ。

だからここがおかしくてたまらない。

時計が九時を示す。

場の空気が変わり、風以外の音が生まれた。

殺氣を感じてとつと右へ飛ぶ。

視線を移し、元いた地を見ると、そこは深く抉れていた。

少し上に田をやれば、そこに女性が立っていた。その者の手には大きな剣が握られていた。

きっとそれで力任せに地を叩いたのだろう。

避けなければえぐり取られていたは自身だ。そう思つと嫌な汗が止まらない。

体勢を直し、距離をとるつとするも、剣を正面に構えてこちらに突進してくる相手。

距離は一向に縮まない。

剣撃をかわしつつ、左手を上げる。剣の重量のためか一撃のスピードは対したことがない。

近寄られなければ危険はないとみていい。

手を上げるのは合図である。

近くに潜まっていた、光一に指示を飛ばすと、刹那、敵の動きが止まる。

「流石は光一、外さないね」

関心と畏敬の念を込めて光一がいるほうを一度みた。

「くつ……」

視線を戻す。苦悶の表情を浮かべて、大剣を地面に突き立てる。片膝をつき、辛うじて倒れないように踏ん張っていた。

彼女は確か、有沢さんとだつたろうか。顔には見覚えがある。足の腱を撃ち抜かれて動きの止まっている有沢さんへ近づき、首に腕を回す。

「なにを」

腕に力をこめて、有沢さんを絞め落とした。

「由紀、一人撃破。一旦引く」

短く伝えて通話を切つた。いまのところ、他に敵影はない。こちらを警戒してのことだろう。

今回の作戦において私は光一とツーマンセルで動くことになつている。

横文字に疎いくせに、銃器の扱いがプロフェッショナルであるパートナーはとても心強かつた。

こちらからは姿が見えないが、光一が潜んでいる方向に一度、手を降る。

退却の合図だ。

私の指揮する前衛は、総勢六人。

バディシステムを原則とし、状況によつては単独や一人以上での行動もありとしている。

光一とは別々に自陣へ急いだ。

「ま、まつてください！！」

高い声に振り返ると、そこに現れたのはセーラー服を来た少女。

俯き加減に顔を伏せ、胸の前で指先をもじもじと絡ませた。更に伏せた顔は赤く、チラチラとこちらを見てくるのだ。

肩口あたりで切りそろえられた髪は、鬱陶しさのない、爽やかな印象を持つ。

華奢な体つきは女の子らしさをより際立たせ、場合が場合ならば期待をしたことだろう。

しかし、そんな甘い期待を持つことはもちろんない。

「た、たわしがお相手致します……！」

一大決心をしたかのような顔つきで、私を鋭く見据え、言い放った。

ただし、一人称を大きく間違えていたのだから台無しだ。「えー」

リアクションをとれず、しばらく互いに固まっていたのだが、口火を切つたのは私だった。

少女は、恥ずかしさからか、更に顔を赤らめ、身じろぎ一つしない。

「たわしがお相手致します！」

恥ずかしさがピークに達したのか、開き直ったようだ。

笑いが込み上げてきたが、失礼千万なのでこらえた。

「なまえ……ぶふ……きいて……くくつ……いいか？」

全くいらっしゃれなかつた。

心の中で笑つたことを謝罪しつつ、状況を確認する。

他に敵が潜んでいる可能性を疑い、周りに気を配るが、当然それだけではわからない。

救いと言えば、場が開けているので、隠れる場所が限定されるので対策は立てやすい。

少女は武装などしておらず、手を推測するのも難しい。

「わざですね」

そう答えて、一礼に一礼した後、何事か呟いた。

すると、一瞬まばゆい輝きが彼女を包んだかと思いつと、光が消えた時にはわざとまでとは違つ服装になっていた。

セーラー服はセーラー服なのだが、漆黒のマント、そして漆黒の帽子（とんがり帽子）（この二つはどうか？）をかぶつていた。

その様は、お伽話や伝奇物で伝え聞く魔法使いの姿。RPG世界での魔法使い、と形容したほうがしっくりくるだろうか。

「わざですね、ね。よろしく。私は麻村玲といつ」

自己紹介もそれなりに、さとねさんは先程とは打って変わって落ち着いていた。

怜俐な表情を浮かべ、まるで皿いだ水面のような静けさだ。

「玲様、お覚悟を」

「ははっ……お手柔らかだ」

魔法使いのイメージは、単体では弱いといった感じだった。

特性や戦い方が不明な以上、油断は禁物だとわかつていたが、先手を取れればいけると踏んだ。

結果、先入観など充てにならず、浅慮な行動は身を滅ぼすと思い知られる」となった。

左腕からは大量に血が滲み、応急処置に巻いた服の切れ端も真っ赤に染まりつつある。

「ふう……」

大きく息を吸い込み、さとねさんは目を閉じた。

詠唱だ。

話に聞く通り、例に漏れず魔法を行使するには呪文が必要らしい。

「神代の槍。罪深き人々はその槍で神を射殺した。滴る血は人を呪い、人より空を奪う。

地に縛られた人間は空を目指す。再び槍を手にとり」

歌うように言葉を紡ぐ。

美しい旋律が終わるとともに、その手には細長い槍が出現した。

可愛らしい少女には不似合いなそれは、長い棒の先端にナイフを巻

きつけただけのよつたな、非常にシンプルな物だった。

柄は黒く、夜の闇を思わせる。

鈍く光る刃が私を映し出しているのが、なぜだかとても不気味だ。

「左腕、痛みますか？」

「す、ぐく」

「あなたの話はリーダーから聞いていましたが、正直いって拍子抜けです。

すごく頭が切れて、冷静で、狡猾で、とても強い。

故に残念です。そもそも不用意に敵に近づくのは愚行です

左腕に目を落とす。正体はわからなかつたが、さとねさんに近づいた瞬間に、見えない何かに一の腕辺りを切り裂かれた。

正体もわからないため、先以上近づくのは不可能だ。

「こ」は逃げるのが得策か。

しかし、そう簡単に逃がすとは考え辛い。

さとねさんとの距離はおよそ五メートル。簡単に詰められてしまう。

迷つて『いる暇はない』。『こ』は逃げよう。

「逃がしませんよ」

牽制されるが、気にせず走り出す。

遠回りになるが、致し方ない。

「戒めよう。戒めよう。傲りし者を。磔よう。罪人を。
逃げ出すことはならず。
裁きを受け入れよ」

歌う。

響く。

朗々と、美しく。

そして、私は逃げられなかつた。

頭が、逃げる選択肢を奪つ。体に動く指示を出していない。

「不思議な感覚でしょ、あるのは分かるのに、壁一枚隔てたような違和感。もどかしいでしょ。なにかに制約されるのは」

なるほど。魔法か。

その万能性に感心してしまった。

「ひとつ聞きたい」

「何でしょ？」

「魔法とは、学問か？」

「……可笑しな質問ですね。じつはそのよのうな話を？」

「興味本位で。学べるなら学んでみたい」

「ふふ。そうですね、学問ですよ」

「ほう。この教授願いたいね」

「機会があれば。さて、そろそろ無駄話は止めましょうか」

跳ぶ。

さとねさんは一瞬で五メートルもの距離を詰め、私に槍が届くぎりぎりの距離で真横に薙いだ。

半歩後ろに下がってその一撃をかわすが、さとねさんは手中で、槍

を回転させて、再び刃が私を捉えた。

突き。

力強い踏み込みとともに繰り出された槍が、真っ直ぐに私を貫かんと迫った。

「なつ……」

槍を膝で下から打ち上げ、上向きにそれた槍を右手で止めてみせた。槍を掴んだまま、屈み込み、片足を軸にしてコンパスのように足を回す。さとねさんの足を払い、地に押し倒した。

「くつ……」

動けないようにマウントをとった。女性の力では力任せに払いのけるのは難しいだろう。

じたばたとしていたが、すぐに諦めておとなしくなった。

また暴れられても面倒である。

このままサブミッションで体力を削り尽と考へた矢先、

「私は力の空蝉なり。脆弱は悪なり。故に虚構の力を行使する」

私の体がもの凄い力で弾き飛ばされる。

空中で体勢を立て直し、足から着地するも勢いは殺しきれず、無様によりひげてしまつ。

「魔法つてのは万能だな」

「いえいえ、そんな」ともないですよ?」

一言ずつ言葉を交わすと、互いに距離を詰めた。

槍が自在に私を捉えんと躍る。

槍術の腕はかなりのものだった。

突き。薙ぎ。突き。と、凄まじい連撃が私を間合いの内側に寄せ付けない。

薙ぎの動作で生じる僅かな隙を最小に抑えているのがポイントだ。単調ながらも攻略のポイントを見いだし難い。

「我は力の空蝉」

瞬間、切っ先が肌を掠める。

「罪人、死を恐れる。苦痛に支配され、誇りを失おう」

「……っ!—」

右足に激痛が走る。槍で切り裂かれた部位だ。

さとねさんはそんなこと知るよしもなく、猛攻を緩めない。

痛む。

じぐじぐ、と。傷口を絶え間なく抉られるような痛み。

「ぐつ……」

力を増幅して速度を上げたのか。

「恐れ、痛みに果てぬ」

「つがあーー！」

傷口に、焼き箸を突っ込まれたかのような痛みが走る。堪えきれず、地に膝をついてしまった。

さとねさんが槍を振りかぶる。数秒後には私を貫いているだらう。

「また、会いましょう」

無情に振り下ろされる。

間もなく訪れる運命に田を瞑り、身を縮ませた。

「R e s i s t」

痛みが消える。動く。

間一髪、身をかわした。

「Last . . . boost』玲』」

力が漲る。立ち上がり、驚愕に戸惑つたとねさんの腹に膝を打ち込

んだ。

吹き飛ぶさとねさん。

一度、二度、地面転がって止まる。

立ち上がる気配はない。

近づいてみると呼吸はある。気絶しているだけのようだ。

「こはは～」

振り返る。激闘の後には似合わない、能天気な笑いを浮かべる人物
がそこにいた。

「お疲れ様っす、玲先輩」

「遅いお着きで」

「わーせん、ソードQNにからまれまして」

「じゃあ……なに?」

「敵と遭遇して戦つてました」

「やつか……といひで時田、おまえも魔法使いなのか?」

「え? 知りなかつたんすか? 前に全員の前で披露したはずなんすが……」

「すまない。絶対見てなかつた。絶対に」

「大切なことなので一回……先輩、もしかして俺のこときらうですか?」

「こやこや

そとねわると本格的にせつ合つ前に、携帯から増援を要請しておいた。

なかなか来ないものだから諦めかけていたが、ヒーローよろしく遅れてやつてきた。

結果的に助けられたので「ありがとう」と礼は言つておく。

割と嬉しそうに「まー」と答え、いかにも近づいてくると顔から提げていたバッグを漁り、何かを取り出ださうとした。

「ありや……」

時田の左胸から盛大に血が飛び散る。

「あ、まこですよ」

「時田……」

時田は片田を閉じ、苦痛に顔を歪めた。

ゆっくりと時田を貫いた槍が引き抜かれる。

同時に私は揺りぐ時田を支えた。

「時田…… しつかりしろ……」

「いや意識ははつきりしてますよ」

逆にこんな状態で流暢に話をしてほしくなかつたが、痛みに耐える姿をみて突つ込みたい気持ちを抑えた。

左胸からおびただしい量の血が溢れ出てきた。

流れる血は時田の服を汚し、私の服を赤く染めてから、地面に吸い込まれる。

「先輩、これ

その手には、大きなサバイバルナイフが握られていた。意味を理解し、受け取る。

「魔法は詠唱を封じればおけ、です。」

「は？」

「帰つゝ、たら教、えますか、ら……じゃ」

そう言ひと田を開じた。時田を静かに降ろし、立ち上がるとなさんを待つた。

「いぐべ

立ち上がったのを確認すると、眩いでから走る。

槍を構え、私を迎撃つとねさん。

薙ぐ。

左からきた槍を逆手に持ったナイフで受け、間髪入れずに右足でさとねさんの脇腹を蹴る。

槍を掴んで引き寄せ、吹き飛ぶことを許さず、肘で胸の中央を打ち、そのまま裏拳を顔面に食らわせる。

仰け反るも、私の連撃に耐えたさとねさんは詠唱始めた。

「 もちろんか」

砂を拾つて投げつけると、やむなく詠唱を中断し距離をとりはじめる。

好機。がら空きの正面にナイフを投擲した。

「あつ」

それとねせんの口から血が零れる。

胸に深々と刺さるナイフが、彼女を討つことを証明した。

駆け寄り、時田と同じく倒れる体を支えた。

「 甘いですよ.....彼のよひ、元気でしまいますよ」

腕の中で力なくこう彼女は時田のほうをみて呟く。

「 生憎と、人間の限界には詳しくてな。喋ると辛いだら、静かにしどけ」

助ける気もないし、助からない。

しかし、戦つた相手に礼儀を持つのがポリシーだ。勝手ではあるが、果てる瞬間を看取るもそのうち。

「 結局、全ての技をお見せできませんでしたが、久々によう戦いでした」

「喋んなつて」

「またすぐ会えますよ。そのときは全力で」

「技を出す隙も」「えねーみ」

「ふふ、相手への気遣いは、情けとどきりますよ?」

そう言って、やとなわんは事切れた。

プロローグ2

鍵を開く。

自分の研究室だ。

机の上の紙束を手に取る。

散らかった中、そこだけは綺麗に整頓してあった。

種類別にファイリングされているそれから必要な書類を抜き取り、振つてある番号順に左から並べた。

一年程前のことである。

私は「これらを学会に提出した。

名声や金を手に入れたかったわけではなく、科学の発展を願い、一
科学者としてこの論文をまとめ上げた。

結局は否定され認められることはなかつた。

かといって、他の学者達を無能だなんだと蔑むつもりもない。
この世界では意見を通せないのが悪いからだ。

「さて、やりますか」

自分を鼓舞するよひに声に出す。

「前書きはこいから……この辺りかな？」

細かな字が羅列されている紙に目を走らせ、黙読する。

『既存の特定元素に、ある特殊な操作を加えることによって、地球上では安定しえない構造の物質を安定した状態で作り出すことができる。』

これだけでならば、科学分野における例外の一例として数えることも可能であるが、この操作を経て生み出された物質の核を破壊した時に完全に物質が消失してしまうという性質があることがわかつた』

『消失というのは形を変えて別のものになるという意味ではなく、この世界から完全になくなるということであり、多量のエネルギー放出と共に無くなってしまう。』

さて、これがどうして他世界性物質であるのか。これだけではそのようなことは言えないが、消えてしまった元の物質の代わりに別の物がこの世界に現れるというのがこの意味となる』

『例えば、炭素を金の原子に変えることはできない。元の物質が炭素の塊だとすると、そして核を破壊し、一度消失させると金の塊にかえることができる。』

大発見ではあるが異世界を証明するには値しない。これだけではないのだ』

『普通、化学的変化は直後に現れるが、これはそうではない。自然の作用であろう、無くなってしまった物質を世界自体が穴埋めしようと百から百一に増えてしまつた別の世界から、九十九になつたこの世界が一を引っ張る働きをもつ。』

物質が消失して二十四時間が経過した瞬間、別の物質が現れる。大きさや種類に依存せず、きつかりと一日が経過することで元の場所に別のが現れる。』

常田頃7

「さあ、やめよう。」

由紀は一度私から離れるとい、走つてこちうに近づいてくる。

何をするのかと思ひきや、せぬ。

「やめ——す」

私にドロップキックをお見舞いしたのだった。

「増援を駄田にして自分だけもどりこへると何事か!」

何も言いかえすことはできない。あれは私の落ち度であり、他の前衛に指示を出すことも忘れていた。

「すまない……なんとか巻き返す」

「意氣込みやよし。でも違うの、あなたもわかつてゐるでしょ

「仲間を疎かにするものに上で指示する資格なし」

「何があつたかは聞かないわ。時田にも落ち度はあつたはず。でも、前衛のリーダーであるあなたが冷静さを欠いた結果よ」

「ああ……」

「由紀さん」

通信担当の雪代さんが何かを伝えると、由紀は急いで講堂から出て行く。雪代さんが後に続いた。

携帯を取り出し、素早くメールを作成し、一斉送信。

左腕の傷ちゃんと処置してから包帯を巻く。血は止まっていたがきつめに縛つておいた。

「あれ、玲さん」

「雪代さん」

『気づけば、いつの間にか雪代さんが田の前に立っていた。

「どうなさいたんですか？」

「なんでもないよ、少し呆けてた」

「嘘が下手ですね。包帯、不格好ですよ？」

「君も人が悪い」

くすくす笑いながら私の左腕に手をかけ、優しく包帯をほどくと救急箱に手を伸ばした。

「……玲さん、傷口は洗いましょうね」

「……どこから取り出した」

雪代さんの手には一升瓶。日本酒のよつだ。

蓋をとると逆さに傾けた。

「いだだだだ、痛い痛い痛いから

勢いよく酒で傷口をすすぐれた。ひりひりといつ痛みが絶え間なく続ぐ。

「我慢しましょうね」

相変わらず「ゴーゴー」と笑いながら酒を注ぎ続ける雪代さん。

やっと終わったかと思うと次はタオルで強く傷口の水氣をふき取り、薬をつけ、包帯を巻かれた。

「はい、治療完了です。玲さん、お体は大切になさって下さー

「いいだろ？ 次にはどうせ全部治つてるんだ」

「そういう問題じゃあいません」

続けて「いいですか？」と切り出し、菌が入つたらどうだの、戦いに支障ができるだの言いつが結局、締めには、

「玲さんが怪我してるのが嫌なんですね

と言った。

優しい。世話を焼きな性格が窺えた。

私は「わかった、氣をつけろよ」と囁いて立ち上がる。

「やつだ、玲さんー！」

「なんだい？」

「今度、稽古つかへだせこよーーー！」

「君が？ うむ、わかった。一段落したらな」

「はいーーー！」

元気な返事はとても気持ちよかつた。

雪代さんを背中に講堂を後にすると、由紀がいた。

講堂の脇にあるベンチで足をぶらぶらさせながら、手持ち無沙汰といった様子だ。

「青春じくさいとからい」

「誰が青春か」

「そんなあなたに朗報です。今回アドローとなつました」

「なに?」

「アドロー♪。アドロー。アドローナ」

「どうして？」

「あちらから申し出よ。今回のゲームなしにしてくれって」

「受け入れたのか。これまだどうして」

「不利だったからよ。前衛はぐだぐだ、後衛との連携もうまくできない。

こんな状態で続けたいの？」

「ぐぬ

もつともである。しかし、不可解な点はどうしても中止を提案してきたかである。

「こつものあれよ」

そんな私の考えを見透かしたように言つ。

「ああ、飽きたのか」

「ええ……いい加減よね……」

戦いはリーダー同士の協議により決められ、ルールもそのときに決められる。

基本ルールは教えられるが、特殊なルールがあると教えられないことがあるらしい。

しかし、今までに十数回争つた中でそんな特殊ルールが適応された

」ではない。

後、リーダーは互いに調停権とルールを一つ追加する権利を持つと聞いた。

とはいっても調停に関しては間に誰かが入るわけではないので、調停というのは怪しいか。

結局はリーダー達の協議による独断だ。

「なんだかんだで、今のところ十三戦、一勝一敗。私たちも情弱ね

「そないな」といひなさんな、由紀

出るのは溜め息ばかりである。

同時に、また訪れる平穏に嬉しさを感じたりしながら。

特になにもない日々

日覚める。

起床時間は決まって六時だ。

意識せずともこの時間には日が覚める。習慣とこいつやつだ。

ジャージに着替えて外に出た。

寒いな、と思えば霜が降りていた。

軽くストレッチをしてから走り出す。毎朝のランニングも習慣だつた。

しばらく走って、体も程よく温まってきたころ、後ろから足音が聞こえてきた。

「由紀か。おはよう」

「おはよー、玲。毎日」「苦労ね」

お互に様だと思つ。ランニング仲間である彼女とは毎回、この辺りで出会つ。ところとは由紀も毎日走っているわけだ。

「走りだす時間はあわせてもいいよな……家隣だし」

「うひうひうひの朝の過」しがあるの

「やうかい。そつかい。じゃあ晩飯時に来たり、朝の四時頃に家に忍び込んだりするのは止めてくれ

「ああ玲、すこしへースあげるわよ」

「何なんだ……」

悪戯を仕掛けっていたかと思うと、うちの台所を勝手に拝借して朝飯を作ってくれていたりと意味がわからない。

先日の話であるが、扉をピッキングでこじ開けやがるので合図の鍵をくれてやったところ話もある。

「由紀、朝飯くつたか?」

本当にペースを上げた由紀の後を追いながら訊ねる。

「まだよ。どうかした?」

「ああ、『駆走してやうつかと』

「〇へ・・・『ええ?』

「リアリーリアリー」

「じゃあ、いつもより多く走つてくるわーー!」

しゅた、と手を上げて走つ去る。

「あんまし走り出すかもよくな……って聞いてないですかよね

食事の準備もあるので、もう戻す」とこぶ。「

家の門が見えた辺りで人がいることに気がつく。

「おや、光一。おはよー」

「アキラッタ……おはよー……」

エクスクラメーションマークがいくつもつつきそつた勢いで挨拶をくられた光一。

家の前にいるのだから私に用事でもあるのだろつか。

「して、どうした」

「飯くわせて……！」

「……話を聞こひじやないか」

「お腹空いた……」

「…………わかつた、しばらくかかるからな？」

「わーー」

門を開けて光一を敷地に通す。

弾丸のようなスピードで玄関までたどり着いた光一は勝手知ったる我が家という感じで扉に手を掛ける。

鍵閉めていたはずの玄関が開いたことはさておき、私も中に入り、門を閉めようと、ふと外を見れば遠くにまた人影をみつける。

由紀だらうが、随分と早い。

手を振るひとした瞬間、昨夜のことが頭をよぎった。

「雪代……さん、か」

昨日の夜、メールで雪代さんとやつとつしたのを思い出す。内容はとこうと。

From・雪代『こんばんは。お時間大丈夫でしょうか？ その、前にお話した稽古の件なのですが、明日はお暇でしょうか？』

T.O・雪代『こんばんは。うん、大丈夫だよ。都合のいい時間にきてよ、明日はずっと家にいるから』

From・雪代『では、朝からお訪ねしていいですか？ えと、気合い満々です！…』

T.O・雪代『教えがいがありそうだね。なんなら朝ご飯はうちで食べないかい？ 一人も一人もあんまし手間は変わらないし』

From・雪代『え！？ そんな、悪いですよ……食事はひとつきますし、昼も持参します！…』

T.O・雪代『まあまあ、私は料理が好きなんだよ。遠慮せずに食べてはくれないかい？ 恥ずかしながら他人に食べさせたことがなくてね。実験みたいで悪いけど感想を聞いてみたくて』

From・雪代『あわわ、私なんかでよければ！… じゃあ朝早く

にお邪魔します！！
お休みなさい！！』

Ｔｏ・雪代『お休み』

「ホーマイゴッヂ」

四人分作るとなると材料が足りないかもしね。

「まあなんとかなるか」

手を降るとふりかえしてくれた。門を開けたままにしておき、家へ入った。

特にならない由々

「エーッ、なんであんた達がいるの？」

「ハーネスから帰ってきた由紀は、状況が掴めませんとばかりに田舎へ帰つせた。

「ユキコ、あせませんか。ねえ……。」

「由紀さん、おせよいわこまわ

和やかに挨拶を交わしてくるのだが、食事はもつだれてくる。

配膳へりこませ手伝つても歸せぬたるが。

「並べるの手伝えや

雪代さんが慌てて目を瞑り取る。

「うむ、ここ十だ。

「お前、うとれたり……。」

光一が由紀に関節技をかけられていた。

「むつ…………俺の関節崩壊するつて

「じやかあしー」

通路で遊んでいたので、まとめて蹴り飛ばすも、由紀は光一を盾に蹴りを防ぐ。

運悪く鳩尾にダイレクトしてしまい、死にかけの「キブリのよひし、元」をのた打ち回りながら悶絶した。動きがきもちわるい。

「お前……ひどいな」

「蹴りをかました奴の台詞ではないわね……」

「私は床にある障害物をどうそつと足を使つたに過ぎない」

「うん」

「ふむ」

「『飯にじみづ』」「

二人揃つて言つと、居間にある食卓についた。

「大丈夫ですか？」

「ソララあ……」

凄く嬉しそうな顔をしていた。救われたっていうのはあいつた様子だらうか。

雪代さんは屈み込んで光一を中心そつこみつめる。

ふと疑問が浮かんだ。

「ソラリツで雪代さんのことが光一？　お前はく……奇抜な呼び名をつけれるよな」

「ノリと印象とお告げで決めてるんだ」

「なんだかお詫び」

「はやい！？」

「あはは、では私も頂きます」

きょとんとしていた雪代さんも、一度はにかんでから座る。「どうぞ」というと手をつけはじめた。他の二人は言つまでもなく既に食べ始めていた。

「おかれり」

「遠慮ないな、ま、そのほうが嬉しいんだけど」

メニューは純和食といつた感じ。鰯の干物に味噌汁、昨夜の晩御飯に大量に作った肉じゃが。

緑が少ないので、きゅうりを千切りにして塩でもんだもの、後は銀しゃり。付け合せにふりかけ、納豆、のり、いろいろ用意してみた。

۷

「……」

「……」

無言。ご飯以外に手を着けた皆が押し黙る。

まずかつたのだろうか、割と料理には自信があつたのになにも感想がないとなると自信をなくす。

「ヨキドキと三人を伺ひ。

最初に言葉を発したのは光一。

「うおお……」

しかし、言葉らしい言葉ではなかつた。口から漏れたという感じだらうか。

さらには涙を流している。箸を握りしめながらだ。非常にシユールである。

「お、美味しいです！」

「これは、これは……つまりだらう

「つぐ……ダメ出しちよつと思つてたのに、これは……

「ありがとう。しかし、腕が試されるのは肉じゃがくらいじゃないか？」

「魚の焼き加減みたつて、ちがつよ」

「ちっか

とても嬉しかった。人から「おいしい」と書いて貰えるのがこんなに心地いいものだとは。

「……お代わりまだあるからな」

口元がにやつこてるのが自分でわかった。見られるとシッ口まれそつなので口にそっぽを向いてこう。

がつがつがつがつ

気にする必要もなかつた。飯に集中してしゃうなぞみていない。

「……つたく

そんな三人を一囲一囲みる俺はきつと気持ち悪いだろひ。

しばらくして、皿が食べ終え「うわんわんさま」と一段落。

「食後の運動と行きますか」

由紀が囁く。

「じゃ、また走つてくるから。夜でも遊びましょー。」

腕を上げてから退室する。

たらふく食べた光一は寝ていた。

「ふう」

緑茶を啜りながら、やつと静かになつた居間を見渡す。
そういえば最近、隅々まで家の掃除を行つていない。午後からやつてしまおうか。

「…………ん

そう思つて坐ると、とことんやつてしまつた。

今日は天氣もいゝ、蔵の中の物を虫干しするのにまた一度よ。

「…………うわ」と

屋根瓦の塗り直しもしないといけない

「あわいひれえーーー。」

「はこーーー。」

肩を揺すりて初めて気づく。

雪代さんは不満そうに眉根を寄せて私の顔を見ていた。

「むう…………

「あた」

中指で額を弾かれた。

「トーリンヘー。

「おれひなこ、わざから無視して……ひどいわ」

「へ？ ああ、すまない。考え方をしていてな」

「あきらかと、今日は稽古つけてくれるんですね？」

「…………おお」

飯の事で頭がこっぽいで萎れていた。

「あきらかと..」

何だか顔色が違つ。怒氣を孕んだ調子で囁つ彼女がとても見事しこ。

「あわか、わすれ」

「てるわけないじやないか、何をするか考えていたんだよ。いやだ
なあ、雪代さんは綻り深いなアハハハハ

言葉を途中で遮つて取り繕つむ、苦笑しこ。

ジト目で見られ、觀念する。「いめんなやこ」と謝ると、ふくせつ

と表情が崩れて、

「よひこー」

と囁つて許してくれた。

「じゃ、外でよつかね」

「はーーー！」

立ち上がりながら、由紀が戻ってきたら少しお手伝いをしてもらおうと思った。

特になにもない日々

「ちなみに、武術の経験は？」

「一応、あります」

「じゃあやめといたほうがいいかもよ？」

「どうしてですか？」

「私は、綺麗な型とか、こうこう風にやるんだ。とか教えることはできない。実際に……んと、相手を倒しやすい？ というか、そういうものだから」

私の武術は完璧に我流だ。古今東西あらゆる武術を研究し、独自に組み上げたもの。

伝統もなにもあつたものではない。

なんというか、完成度では一介の武術に負けてはいないと自負しているが、如何せん、卑怯なのだ。

そして、色々な技を使えることが必ずしもアドバンテージになると限らない。

時田も組み手ができる位に体術を使うので、相手をしてもらつていた時に言われた台詞が、

「天才が厨二病をこじらせるといんな風になるのか……」

厨二病とは何かと尋ねたところ、「若氣の至つですよ……」と答えていた。

いやはやまつたくその通りである。漫画の中でなければこんなもの使う機会すらないといったのに。それでも必死に基盤を磨き、技や型を研究し、作り上げた。

新しく創造される流派は少なくない。それでも、それが大衆に浸透しないのは、それらの伝統的武術がどれほどに完成されたものかを暗示している。

「空手、少林拳、ボクシング、テコンドー、ムエタイ、素手で行う格闘技だけを上げてもきりがなく、その全てに歴史がある。東洋武術は美しく、西洋武術はダイナミックなものが多い」

「つまりどういふことですか？」

「びつして私は知識をひけらかしているのだらつか。言いたいのはそういうことではない。

「殴り合い用の格闘技だけいのかい？」

「武道を志す者には概ね二者ある。

心身を鍛えたい者、ただ強くなろうとする者。

後者には大成はないのかも知れない。

「私は君に精神を説くことはできない。心身相関といつ言葉を表現しようとするならば、王道を知るのが一番だ」

「わたしは……あきらさんに教えてもらいたいです。こんなこと言つたらいけないかもせんけど、楽しく習いたいんです、武術なんとなく、ドキリとした。その好意が私にむけられているようです。

「はは……乐しく、か

「はーーー、あきらさんは難しく考へ過ぎるんだす」

「性分でね、直そうとは思つてゐるナビ。うふ、ありがとうございます」

雪代さんは、はにかむ。

可愛らしげ顔立ちには笑顔がよく映えた。

「組み手できるかな?」

「はーーー。」

「構えて」

力や熟練度を測る意味でも組み手は重要だ。

適度に体を温め、ポテンシャルを引き出すにはうつむきである。

半身に構える私に対し、正面のまま自然体で腕を上げる。

ボクシングに近い構えだ。但し、腕の位置は若干低めだった。

「よし、来てくれ」

雪代さんは頷くと、体を落として駆け出す。

間合いに入った途端に蹴りがきた。

体を捻りながらの回し蹴り。空中で一回転して右足を繰り出す。

なかなか鋭い。

しかし。

「柔軟性、二重丸、筋力、三角、スピード、丸」

ひらりと蹴りをかわして、着地点でつんのめる雪代さんの手を掴む。

「いい素材だ」

「あわ……」

「ほんじゃ、ま、由紀が帰つてくるまで休憩」

「え?ー」

「相手がないと……私はそいつた相手には向かないからな、それに比べて由紀は素晴らしい」

「そんなんあ

何だかしょんぼりしている。しかし、これは納得してもらわなければならぬ。

「なんだか冷たいです……今日だつてあきらさんと一人きりだと思つてたのに」

「光一は不可抗力だつたんだ」

「え？ 私しゃべつてました？」

「すまない。あの二人に『ご飯を』ひとつそり持つていかれたからな、昼飯は任せたおけ、たくさん作るから」

「あははあ……なんだか解釈が自然に不自然ですね……あきらさんらしい」

「材料を補充しどかないとな」

「聞いてないですし」

雪代さんがなんだか泣いていた。
私といて楽しいのだろうか？

「買い出し、とこつのもおかしいが、付き合つてくれないか？」

「はい」

連れ立つて家を後にした。向かつ先は無人の商店街である。

家からはさほど離れておらず、十分もすれば着いた。

よつこそ冬桜商店街へ。とかれたアーケードを抜ける。人の気配はない。

「全くもって泥棒のような気分だよ」

商店街には店が立ち並んでいる。かなり規模は大きく、食料品から日用品、ファッショントやら果ては家具がある店もある。

「七不思議ですね！」

無人。しかし、店内にはBGMがかかっていたり、魚屋では新鮮な魚がざるの上で跳ねていたりと現実離れした光景だ。

そもそも、私達は二十人しかこの世界にいないはずなのに、水道、電気、ガス、インターネット、携帯と、全てが機能している。もちろん、管理している人間などいないし、金を払う必要もない。

店の商品を全て取り扱つても、次の日には違つ物が並ぶ。品物に入れ替わる様を見ようにも、なぜか夜中は全ての店に『入れない』。

私が元いた世界とは似て非なる世界。

まるで誰かの意思があるようで氣味が悪い。

生物を観察するとき、人工的にそのものが生活する環境を再現させることがある。死なないように食べ物を用意してやり、といった感じだ。

自意識過剰だろうか、いや、正直な話、この世界がなんであるかをさぐることはできない。

そういうた設備もないし、世界についての定義が定かでない世界からきた私には到底理解し得ないだろう。

「 もー…… あきらひやん。」

『 気づけば雪代さんが田の前にいた。両手を広げて私の行く手を阻んでいた。』

「 じりしたの? 」

「 じりしたの? じゃあ、あつませんー また、考え事してゐるでしょ? 」

「 ああ、すこしな。悪い」

「 あきらひやん、私のこと嫌いなんですか? ! 嫁出でからー ふもつやべつてませんよね」

「 あれ、わうだっけ? 」

「 私、勇氣出してあきらひやんを誘つて、うぐ、いえ、とは言つて、ぐす、もれつこう間柄ではなく、ただ稽古を、でも、でも……ふえ、うぐ」

田尻に涙が浮かべ、私に向かを語り。涙声でなにを語っているのかよくわからなかつた。

「 え、あの、じめんー、じめんねー、泣かないでー。」

このよつたな場面でじつすればいいのかよくわからない。

理由はよくわからないが、私に落ち度があるよつだ。

もしや、好き勝手に予定を変えて、拳句、買ひ物? に付き合わせ

たことを怒つているのだろうか。雪代さんは人がいいので断る」と
もしないだろ？。

「「めんね、雪代さんのこと考えずに」」
ちの「とばっかりしちゃ
つて、怒らないで、いや泣かないで！ とにかく機嫌直して！」

「あきらさんのばかーーー！」

そう残し、彼女は駆け出して行った。

「雪代さんーーー！」

特になにもない日々③

あれから一日経つ。

雪代さんからは音沙汰がない。フォローのメールを入れたが、理由もわからず謝つても納得してはくれまい。

人と関係が悪くなるのは嫌だ。

しかし、どのように振る舞おうと諍いはある。相手が納得しなければ、私が納得できないのだ。

「……っ」

目覚めはいつも六時だ。眠い。

だらだらと無駄に悩むのは学者の性かもしれない。

この一日間はあまり寝ていない。

布団から体を出すと、冷たい空気が体を震わせた。いつもよりも冷える。

カーテンを少し捲り、窓の外みると、一面真っ白だった。

「雪か

思わず、言葉が漏れた。物珍しいものには興味をひかれる。大人げなく、雪に気分が高揚するのを感じた。

視界を部屋へ戻すと、携帯が点滅していた。

折りたたみ式の携帯、割と多機能なそれを私は気に入っている。フリップを開くと、画面の端に新着メール3件と表示されていた。

差出人は全て由紀だった。

From：由紀『雪だよ雪』

From：『起きなよー 雪合戦しましょ』

From：『雪だるまでけた！』

何だか可愛らしい。無邪氣な内容に思わず顔が綻んだ。

外に出るため、洋服ダンスからロングコートを取り出す。マフラーと手袋、靴下も着てから玄関に手をかけた。

扉を開けようとして、ふと思いつく。

食料を補充したときに、小豆があつたはずだ。せんざいを作つておこう。

せんざいを作つてから、外に出ると、由紀がいた。

「こやいやいやいや」

「玲、遅い」

「人の庭でひとり雪遊びつてなあ」

「そい」

顔面に飛んできた雪玉を受け止める。

「石をこれるな石を

砕いて中をみると本物に少しが石が混じって「そい」

顔面に飛んできた雪玉を受け止める。

「石をこれるな石を」

砕いて中をみると本物に少しが石が混じっていた。

「全く、当たつたらビリベリ

雪玉が顔面に当たつたようだ。冷たい。

「つぐーー

「うう……うう

雪を拭しながら由紀をたしなめる。

しかし、反省する様子はなく、続かずまに雪玉を投げてきた。

避けきれないものは裏拳でとりえて砕き、その場で避けられるものは体をくねらせて避けた。

「何球あんだよー」

通算一百五十。いったいどれだけ暇だったのだ。

「あと二十一百よ」

「まだ十分の一も投げてないのかよ」

「かまくらつくつましょーー！」

「清々しいくらいガキの思考だな」

言いつつ、納屋へ向かい、スコップを取り出す。雪掻き用とかではないので使い勝手は悪いが、ないよりましだろ。

「全員呼んだわー！」

「マジかよ、村上さんとかには迷惑かけるなよ

「実はもう歸るんだなこれが

振り向くとそこには村上さんがいた。

こんなに寒いといつに、膝上までの短いスカート、カッターシャツの上にセーターを重ねた姿だった。

靴下は黒の一ソックス。

全体的に服がボロボロであるのはなぜだ？。

ふわふわした質感の金髪の髪は、腰辺りまで髪のある由紀よつよさ

らに長い、膝裏あたりまである。

縁のない眼鏡（本人曰わく視力はよい）をかけ、いつもヘッドフォンをつけている。

凛然とした顔立ちは少しきつめに見えるかもしないが、間近でみると可愛らしい。

すでに目を引く外見であるが、パツとみて一番最初に特徴的だと感じるのは、やはりその双眸だろう。

虹彩異常症。所謂、オッドアイ。左右で瞳の色が違う。片や、澄んだ冬の空のように碧く、片や、翡翠のように鮮やかな緑である。

猫に多く見られる虹彩異常症だが、それは遺伝的なもので、人の場合は病気や事故などにより後天的に虹彩の色が変わることが多い。

無口な上、スタイルが特出して個性的なため、仲間内からも近づき辛いと言われている。

だが本人はそれを気に揉んでいるようで、よく気づき、他人を気遣うが、なかなか報われない感じの心優しい人である。

機械全般のスペシャリストで、もつてゐる工学的技能はもはや、私のいた世界のどの技術者をも凌ぐレベルだ。

驚くことに彼女は機械工学とひと括りできる全ての分野においてその知識を有するのだ。

科学分野全般に興味のある私は時々、教えてもらつたり、研究や機

械の製作を手伝つたりするので仲がよい。

「村上さん。おはよー」

「おは……」

そう言ひて、手を小さくあげて、ぱぱぱぱっと振る。

「ふふふ」

突然、由紀が不敵に笑つたと思うと、家の門が開かれた。

哲学的な話だが、死んでも生き返るのなら殺しあいのかとこう話だ。

勿論、このことは死ねば一度と蘇ることがないという現実を知つていてこそである。

人は認識できない概念へと考えは及びにくい。

それを認識できる形に置こうとするのが科学であるが、そもそも、死がないならこんなことを考える奴はない。

死がない世界ではない。生き返れる世界だ。

死亡から一十四時間。その要因が怪我であれ病氣であれ、完治して生き返る。

神秘の力……ではないという。私が来る前からこの世界にいた由紀。「空氣があるくらい自然な」とよと言つた。

例えは微妙だと思った。それも神秘だと思わぬくもないから。

時間という概念を知つてゐる私達は始まり終わりにこだわつて生きてる。

始まりがわからない世界だから、神秘と呼んだほうが楽だ。

私は分野として確立していない不思議に興味はない。

空氣があるよつて自然なことなら、気にする必要はないか。私にはわからない。

しかし、例え生き返るとしても、私は相手を傷つける、傷つけた。

故に、相手を排することにて、ヒューバイズムを發揮するために、覚悟と責任をもとつと思つ。

自分のルールだ。私の常識では、殺しは悪なのだから。

「……ああ」

「起きたか、時田」

意識がはつきりしないよつだ。

さつきまで『死んでいた』時田は、田を擦りながらベッドから体を起こす。

「玲先輩、なにしてるんですか、人の家で」

「残念だが大学内の医療施設だ」

大学は多種多様な研究ができる。

経営しているはある資産家だが（とはいってもこの世界ではない）、名のある研究者や、将来有望な研究には金にいとめをつけない。

そういうえば、私がこちちらに来たとき最初に驚いたのは、この世界が

私がいた世界とまんま同じだったことだ。

家の場所も表札も同じ、あちらからもひってきた鍵も使えた。

家にあるPC内のデータも「ひそり同じであった。

しかし、インターネットやテレビは情報が更新される」とはない。

人がいないからだ。「もともとあつたページなどはあるし、検索エンジンも機能する。運営がいないのに使用できるのは電気やガスなどと共にしている。

社会のシステムを使用できるのは人間のみだ。人間が都合よく、使いやすく作っている。

機械は自身を管理できない。これは村上さんの言葉だ。

私には確信がある。必ず、この世界には管理者がいる。

「ああ……なんだ、俺、死んだのか」

まあ、それがどうした。という話ではあるが。

「すまない、俺が不甲斐ないばかりにな……」

「……そう、そうだ……」

「悪い……」

「魔法……」

「はい？」

「教えるつていつたじゅないですか！！」

「……ええ？」

「運動場行きますよ！」

「まで……おー！ 引っ張るな、」けるから…」

といつわけで、死に上がり？ の時田に連れられて外に来た。

「ど」からもつてきた

ホワイトボードが何故かあつた。

「では魔法の講義を始めます」

「聞いたぢやしない」

「魔法は概念的知識形態を顕現します」

「なるほど、わかんないや

「俺達は様々な要因によつて世界自体から制約を受けます。重力に
しろ何にしろ、能力に制限を掛けられます。勿論、脳がかけるリミ
ッターをふくめて」

「はあ

「知識形態といつても、文や図で表せるような確固たる形式があるわけではなく、感覚といったほうが近いです。まあ、そういうのも、法則や決まりもありますが」

「存在する当たり前の世界のルールに、ありえないことが可能になるルールを書き加えるのが魔法です。それを可能にするのが魔力、そして、呪文」

「……なるほど」

「魔力はルールをねじ曲げる度合いでより変化します。極端な話、相手の存在を無かったことにしてみることも可能です。理論的な話ですが」

「無敵だな」

「そう、チートです。しかしながら弱点もあります。呪文ですね、はい」

「詠唱か」

「はい。そうですね。詠唱中は精神を集中して、世界に修正をかける式を構築します。

ただ中断されても続けて詠唱できますよ」

「じゃあやっぱ最強じゃないか?」

「それがそうでもないんですよ。極端に言えば相手の存在を無かつたことについていましたよね。詠唱……呪文には意味があります

「……」

「魔力を世界の修正に使う燃料とすれば、呪文はラインです。そのルールを決定づけるためのバス。さとねの奴の「力」の増幅、あれは俺ではできないですし、実際に言う単語に意味もありません」

「長ければ長いだけ修正をかけるときの管が大きくなる」

「御明察。自分内の知識形態から世界のルールを上書きするには、とうぜん、情報を多く送れるほうがいい。

送り出す魔力、大きければ大きいだけ、多ければ多いだけ、本流をねじ曲げるのは簡単です」

「だが、呪文に意味がないなら、戦いの時に同じ詠唱で違った術を使えばよくないか?」

「ごもっとも。しかし、です。言葉とは勝手に人間が創つたものですが、意味をもつと独立するんですよね」

「言葉自体も世界の縛りにはいると?」

「先輩あつたまいいー。言葉と術式をうまく組み合わせると、魔力の消耗が少なく、高速で詠唱できるわけですわ。

対して、意味が異なるとどうでしょうか、言葉の縛りを修正して、かつ違う術式、効率が悪いんですよ」

「なら、ある程度、呪文を聞けば術を予測できるのか。意外と難儀だな」

「いえいえ、それさえクリアしちゃえば、奇跡を我が手につけてね。
幅広い応用が利きますよ」

聞けば聞くほど興味をそそられる。

特になにもない日々4

次々と仲間が倒れていく中、残ったのは私と由紀、雪代さんだけであつた。

強敵。その意味を噛み締め、揺りぐいとの間に相手へ、またひとつ、ふたつと、

雪玉を投げる。

「まじ、こくらなんでも魔法は反則じゃないか？」

「あはははは！」

「ときたあああああ」

分厚い雪の壁は、魔法により超高速で打ち圧される雪玉でことも容易く崩われる。

こちらから投げかる雪玉は意味をなさない。なぜなら、すべて空撃されるとからだ。

「そり、雪玉を作つて。玲、投げて。壁を修復するから私のところへきたのは弾いてね」

「無茶いつな」

この雪合戦のルールは、腕、足以外の部位三発くじつたらアウト。アーム拳や蹴りで雪玉を弾くことが許されている。

他、使えるものは使つていいが、ただし真ん中に線が引いてあり、それを越えて攻撃はなしだ。

しかし、手慣れたものだ。

由紀は一瞬、とまではいかないが、ものの数十秒で即席ながらも防壁を築きあげる。

スコップを巧みにつかい、高く、堅く仕上げる。

作つては入り、壊されてはまた作り、と防戦一方である。

五対五。

あちらはひとりも減つてないので対して、こちらはもうすでに一人脱落しており、暖かい室内から私達を応援していた。

二人……村上さんと光一であるが、炬燵の天板にもたれかかり、ぐでーつてくつろいでいる。

いい気なものだ。

「できました！..」

「オーケー。玲、行くわよ！..」

「任せろー..」

由紀と雪代さんは両手に雪玉をもつと、私の後ろに移動する。

私は手の関節を曲げ、形をつくると掌底で壁を穿つた。

私達を見ながら攻撃しなければならない時田は、壁の内側にはおらず、前で堂々と戦っていた。

自らの壁を壊しての奇襲。流石に驚いたのか、一瞬、たじろぐ。その隙を逃さず、後ろの二人が雪玉を時田にぶつけにかかる。

「しまった！」

胸、腹、肩、顔と四発続けて命中。

攻撃の要である時田を討てたのは大きい。
砕けた雪壁の破片を集めて投げる。

当然、相手の壁を壊すほどの威力は出せない。

由紀と雪代さんは壁を作りにかかり、私は雪玉がこなによつ援護にまわる。

たちまちに出来上がった防壁の裏に隠れる。

これからは普通の雪合戦。

「玲、右に避けなさい！！」

反射的に右に飛ぶ。

元いた所に大量の雪玉が降り注ぐ。

「あぶねー。よくわかつたな」

壁で見えないだろつ。いや、上からだつたらから見たのだろつ。

「それよつも……」
「れ」

スコップを手渡される。何に使えばいいのだ。やつ前で雪玉をのせられる。

納得し、勢いをつけたスコップを空に向けてスイングした。

「わ
「の

「あ
「や

「へ?
「

「油断大敵じや
「の」

四者四様。やられてリアクションを示す。

緊迫した攻防は一変。同じ攻撃で裏をかいた私達の勝利に終わる。

戦いはいつも呆氣ない。

時田を失った城は容易く陥落した。

「はい。あんたたち、反省点をあげなさい

「時田に頼り過ぎました」

「やめの気のない」

「統率者がいない」

「そもそものポテンシャル」

「あんたたち……」

呆れる由紀の心情はわかる。わかつてこむのこしなに彼らせでやるせなさを感じる。

「足りないのは雪玉のストックよ……」

「えええー?」

まだそれをアッショするのか。

「あ、中に入ります。寒いわ」

「」「」「」「」「」

そろそろと屋内に入つていぐ。

私の家だといつ認識はあるのだろうか。

「あはは、ああひやんぢんまいです」

「雪代さん」

体を動かしたからだらつ、若干顔が赤い。

「口一口と優しい笑いを浮かべ、私に励ましの言葉をかけてくれた。

「おれ、なぜ、こつも由紀さん」振り回せない感じですか

「全くな。それよつ中にへり、冷えるよ?」

「はい……」

雪代さんを促し、家へと向かつ。たつたの数メートルの距離。

その間、互いに押し黙つていた。

一步分だけ先を歩く雪代さん。玄関までたどり着き微妙な空氣のままに、一人ぼっちの空間が終わろうとしていた。

しかし、私は彼女に謝らなければいけないので。いまを逃すと完全にタイミングを失う。

「……あ、の、」の前は「めん…」

「あきらさん?」

「その……気に障った理由もわからず」謝るのも無禮だが、いやむやにして、そのままといつのまじけないと黙つ

「あきらさん?」

「なんとかうか、うか、『めんなさい』

深々と頭を下げる。

無茶苦茶である。

許してほしい。嫌われたくない。

真意を察する」ことができないで傷ついている相手に対して、とんだ
非礼である。

まあ」「子供の理由。

わかつてないのこりりあえず謝る。
胸にもやもやとこやな感覚がした。

その違和感がとても不快である。

自身に苛立ちしか覚えない。

「だから、ああいうやんはおばかさんなんですね」

「うむ……」

「謝つてばつかつじや、男らしくあつませんよ？　たまには甲斐性
みせてください」といひてゐる

「ははは、甲斐性なしつてか」

「難しく考えないでください」

ふこて、皿を細め。

優しく。

「でも優しく顔色で。

雪代さ、

「自分じゃないんだから、相手のことなんて理解できません」

彼女は語る。

「勝手に分かつたふりして、相手が望んだ言葉だけを探す、そんなの嫌です」

いつでも。

いや、たまにだけでも。

「歩みよひとして、履き違えて、それでも、相手を思いやれる」

彼女は私に大切なことを教えてくれる。

「わうこう心が、とっても暖かくて、愛しいんですから」

ヒーヒー。と。

すべての罪を許してしまって、その微笑みを私に与えてくれた。

見惚れずこじられようか、いや不可能だった。

頬が熱くなり、心臓が大きく跳ねる。

彼女はいつも表情にもどり、扉を開けて中に入つてしまつ

た。

寒い寒い中、ひとつまつたくなつた。

それでも、この動悸や体温の上昇はじまいへおそれつてくれなかつた。

「して、なぜ外に来た?」

「そりやもちろん、先輩に魔法使いになつてもらおつかと

「はい?」

魔法使いとはそんなに簡単になれるものなのか。

それはさておき、すんなりと異能の力の存在を受け入れている自分が不思議であつた。

元々、創作物が好きだつたせいかも知れないが、これは世間で言う『現実と空想の区別がつかない人』ではないだろうか?

少しばかり悲しい。

「いまから、火の玉ぶつけるんで、『Resist』って言つてくださいね」

「は? おい待て」

「I exercise the flame」

お構いなしに詠唱を始める。

時田の周りの空間が一瞬だけ揺らぎ、赤い炎が現れる。

「イメージしてぐださい。炎はなこという元々の理にもどり。まあ、田常でも思い浮かべてください」

振りかぶり、投げるよじにしてその炎を飛ばしてくれる。

勢いよく、頭ひとつぶんくらいの大きさの炎弾が迫る。

「なんかよくわからないが……Resister!」

叫ぶ。

その瞬間、炎が消え失せた。

散るよじ、細かく、薄れて、消えた。

「E.C.K.

驚いた様子で私を見つめる時田。

「どうしたんだ、時田？」

「先輩……才能に溢れてやがりますね。呪……祝つてやる」

「そい、自分でわかるからマンガみたいな台詞回しやめ

「ふひひ、わーせん」

「今日も時田はいい調子だ。

「さて、先輩……魔法使いになりましょつか」

「ようわからん。勝手にしてくれ」

私に近づいて、私の手をとる。

「Awake - the wisdom」

「……」

いつものようならふやけた印象は皆無。

ただ、真剣に唱える。

「From I to you」

「Resist」

「ちょ、なにしてんすか。打ち消さないでくださいよ」

「いや……つい

「つい、とか。つい、とか

先程のようにキャンセルできるのかな、と考え、やってみたが、思つた通りできたよつだ。

怒るのも仕方ない。彼は真剣にしててくれているのだ。興味本位でふざけたことは反省しないといけない。

「「「めん」「めん」

「ま、その考えがわからんでもないんですが

同じ詠唱を繰り返す。

「ト　　ヨ　　ヒ」

私達を中心に光の輪が描かれる。

シンプルな、ただの円。

魔法陣といつにはあまりに単純でつましい。

「すこし、気持ち悪いですが、我慢してくださいな」

膨大な光が私達を包んだ。

特になにもない日々

「やうだ、鍋をしよう」

「断る」

由紀の思いつきを却下しつつ、温め直したせんざいを炬燵と炬燵周辺でくつろぐ仲間達にそれぞれ配った。

部屋はけつこうな広さなのだが、やはり十人もいれば少し暑いくらいだ。
部屋の中は暖房、炬燵、電気カーペット、と正直少し暑いくらいだ。
部屋はけつこうな広さなのだが、やはり十人もいれば少し狭く感じる。

「ならトランプだよ」

「ならそこにある」

そう言ってタンスの上あたりを指差す。

そこには小物入れが置いてあり、色々な物を入れている。

「とつて!」

「おのれで取りなさい」

「えー」と言いつつ、立ち上がりつて持つてくる。

「もつひとつないの?」

「書斎でみた気がするが」

「寒いよ、とひてきてよ」

「仕方ないな、とひてこよつ。書斎にはあんまり入ってほしくない
しね」

「仕方ないわね、私がとりにいくわ」

「何を期待してこのか知らないが、散らかっているとこうだけだ
からな?」

「きこちやいねー」

いつもの事だが、話が終わる前に消えていた。

廊下のほうから「うおおお、さむいこい」とか聞こえてくるが気に
しない。

みんなと雑談を交わし、由紀が戻るのを待つた。

「玲殿がいう『インターネット』なるものをしてみたいのだが

「使えるけど、使えない、かな?」

ネットは凍結しているからな。

「玲、なかなかの隠し方だったわね」

由紀が戻ってきた。右手にトランプ、左手に本を持ち、居間の扉の前でその二つを掲げる。

「どうでもいいのだが、扉を閉めてくれないだろ？」「寒い。

しかし、換気に一度よいか。と考え、由紀の話に付けてやる。

「して、なにをみつけた？」

「まさか、普通に本棚に収納しているとは……恐れ入ったわ。まだまだ甘いけどね」

「由紀はもう少し人の話を聞く」とを覚えよ？

「玲は年頃なのにやけに大人びているから、この手の本はないと思つてたけど、いやいや、むしろ大人の嗜好品かしら」

この手の本……つまるところ成人向けの本である？が、生憎と私はそのような本を持っていないはずだ。

もしかしたら、こちらの世界を解き明かすキーアイテムなのでは。そんな思考を巡らすも。

「医学書じゃあないですか」

そんなどこだら？

由紀よ、私はなんだか悲しい。

「甘いわね、玲。これにエロを見いだしているんでしょ？」

確かに、人の裸体なども描かれているが、飽くまで図解であり、他意があつてのものではない。

「著者と私に失礼だな」

「うは。 それはもう飯三杯はいける

時田よ、どうして絡んできたのだ。

「あー……それよりもせつやとにかくひいてトランプをしようではないか」

「せうね」

自分で無理やり感がわかつっていたのか、医学書を後ろに放り投げる由紀。

本を大切にして頂きたい。

丁度換気ができたところで扉を閉め、私の隣に腰掛ける。由紀もその意図で開けていたのかもしれない。

変な所で気が付く奴だ。

「掘り炬燵いいー」

正面に座る村上さんが咳く。悦楽の表情で台の上に突っ伏していた。

何はともあれ、その意見には賛成だ。

普通の炬燵のように寝転がれない難点もあるが、それを差し引いても掘り炬燵はいいと思う。

「レッツ大富豪～」

「定番だな、私は好きだけど」

皆が集まる毎にやる定番のゲームにならつたある。

おかげでルール説明もないで済むのではあるが、如何せん、同じゲームは飽きがくる。

私はいいが、みんなが嫌と言えば、ゲームを変えなければならない。

「　　「　　いえー　　」　　」

それも杞憂に終わる。みんなノリがいい。

「さて、特殊カードの確認。五スキップ、七渡し、八切り、十捨て、Jバック、スペニ返しあたりでいいわね？」

特殊カードは増やそうと思えばいくらでも増やせるが、あまり多いと逆につまらなくなる。

トランプは二つがあるので、五、五に分かれてやるのがいいだろ？。

「階段あり、階段革命あり、joker革命ありでいくわ

革命にも色々ある。私の知っている特殊な革命は九を三枚出してクーデター、七を三枚でななさん革命。

などなど、無理やり感溢れり革命も少なくはない。

「それじゃあ、大富豪と富豪はあとで大大富豪決定戦ね」

要は勝つたもの同士で決定戦をしようといふのか。

「あたし、玲、雪、光一、一馬。のグループと、時田、そら、ゆかり、アイリス、クロエのグループね」

「あんたら、いい加減、俺を名字で呼ぶのやめません? !」

「時田は時田だ」

「先輩……」

悲しそうな目で私を見る時田。

確かに時田には、妖といつ名があるが、なぜか皆、時田としか呼ばない。

キヤラの問題だと思う。

「じゃあ、妖。うわ……違和感しかない。時田よ、やつぱつ時田よ

「私もそう思ひ」

皆々、それに同調するように頷いた。

「わかりましたよ、時田でいいですよ」

やかへや氣味で、少しおじいさんだった。

特になにもない日々6

「運いいな、おい」

じやんけんで最初になつた由紀は「ワントーンキル！」などといって、カードを出し始めたが、本当にワントーンで上がつてしまつた。

十を四枚に「joker」を一枚出し、特殊効果によりカードを六枚捨てるので手札はそれでなくなつた。

「勿論、六枚でも革命よ」

私の手札は、「二が三枚、エースが一枚、九が一枚、七が一枚、五が三枚、三が一枚。

はつきりいつて微妙な手札だ。革命前ならばかなり強い手札であつたのだが。

十と「joker」、捨てた札は「」を四枚。

どれだけ運がいいんだ。

「流すぜ！――！」

「テンションたかいな」

光一は相変わらずだ。

由紀の次は光一で、その次が私、後に村上さん、一馬と続く。

「俺のターンだよなー！」

二を一枚。だし方としては順当か。

続いて私が九をだす。

六、四ときたところで一度切れる。

一馬は七を一枚だし、次の光一に一枚手渡す。

光一はハで切り、七で私に五を渡してきた。

「ナイスだ光一」

「よくわかんないけど、どういたしましてーーー」

親指を立てるど、一カツ、と歯が輝きそうなくらい眩しい笑顔を返してくれた。

七を使い、一を村上さんに手渡す。

六、四、三と続いて切れ、またも光一から。

六を出したので、すかさず三をだし、私のターン。

五を四枚出し、革命。だすものがいなかつたので私のターン。

「うおーーー！」

光一が嘆く。「二や四でも持っていたのか。

一を出す。jokeはすでにでているので出せる者はいない。

一を出して、私が一番。

「期待通りね、玲」

「玲つよつ」

一馬がこぼす。

「大富豪は強いぜ」

謙遜はしない。大富豪は強いと自負している。運を含めて。

「すげ」

後のゲームは特に山場もなく、強いカードを持っていた一馬が三位、うたた寝しながら参加していた村上さんが四位、ビリが光一であった。

「やる気ないわね、あんたたち」

暇つぶしの一環なのだから仕方ない。

「頂上決戦ね」

由紀、私、アイリス、クロエの大富豪。

「そうね、なにかないと燃えないわ。一位には最下位を自由にでき

の権利とかつらましようか」

「定番だの。いいな」

定番は面白から定番たるのだし。

「「由紀様」」

「なーに?」

「「一等は、最下位になにをしてもよしinですか?」「

「ええ。何しても、何させてもこいわ」

「アイリス、アキラを自由にできるか?」

「やつたー。勝ちましたー……クロエねーたまー。」

「(の姉妹は勝った氣ですね)

「時田、本気でやれよ……」

「いや、実際手札悪かったんですよ」

「魔法は?」

「俺をチーターみたいに言わないでくださいよ」

「悪い悪い」

「まあ、それはいいんすけど。先輩、あの姉妹には気をつけてくださいよ」

「アイリスの方はよくないか?」

「先輩、なにを言つてるんですか、アイリスのほ

「アキラ、はじめましょ」

「あ、ああ、時田は大丈夫か?」

すごい速さでクロエが時田にボディブローを入れたように見えたのだが。

返事はないが、時田を信じよう。

「へへへへへ」

「なんだ、ゲームを変えるのか?」

由紀が突然笑い出したので、なんとなくそういう思いで口にしてみる。

「よく分かつたね」

「や、なんかな……」

よく考えたら怖い。以心伝心とかではないのだが。

「一対一のチーム戦にしましょ」

「チーム戦好きだよな、由紀」

「負けたときの予防線張るなよ。私を差し出す気満々だろ」

「負けたときの予防線張るなよ。私を差し出す気満々だろ」

「なにをしますの？」

クロエの疑問は当然だ。第一、トランプで「対」とかあつたらうつか。

「私発案の『トランス』やるわよ」

「なんですかそれは」

「カードバトルよ」

「はあ」

つまりどうこうことだ。

「トランプをまず、黒と赤に分け、それぞれにjoker一枚ず

つ

「カードバトル……デッキど？」

「そうそう。端的にいうと、数字を強さに見立て、相手の持ち点を削り、零にしたほうの勝ちというゲームよ」

「基本ルール、最初に互い三枚カードをひく。手札ね。バトル場には最大三枚、自分を守るためにカードをおくるのだけど、そこには

一枚。カードをバトル場に出すにはその強さに見合ったコストがいるのだけど、そのコストを置く場、無限

「持ち点は五十、零になつたら負け」

「ながつたらしい説明だな」

「仕方ないでしょ。続けるわよ。カードには特殊カードがあつて、数字の小さい一から五までのカード。あと・joker」

「ま、単純にすると十三が最強だもんな」

そう考へるとよくできているとおもいつ。

しかし、ルールを覚えるのは面倒だ。

「Hースはキングに勝てる、一は相手のシールドを破壊できる、二は相手の場の最強カードの強さを三下げる、四是出したとき相手のコストを四削る、五は・jokerの効果を無効にできる、・jokerは相手の全ての場を流す」

「シールドは手札からノーコストで出せるわ。もしそれが特殊カードなら効果を付加した上で差し引きになる」

面白そうだった。

「本来は一つのトランプを二つにわけるけど、トランプが二つあるから、一人で一つをつかうことにするわ」

「持ち点どこののは?」

「これは五十で、バトルで負けた差分が削られる。勿論、自分を守る札がなければダイレクトな数値が削れるからね」

「基本は二段」とは二段くらいね」

「やるのはやへな」

「一度練習でやつてしましちゃう」

「やつだな」

彼女の流儀

「はい、今回の//ラ・ショノも至つて簡単！」

「//ラ・ショノ……みつしょん、醤油のことか？」

「光一、無理がある

「今日は団体戦よー」

「団体戦とな

壇上の由紀の声はよく通る。

私は今回何も知らされていないので、真剣に話を聞かなければならない。

「やつ、五対五、代表を選んで三本先取

「形式は？」

「相手を氣絶させたまつた勝ち。武器はなし。他、制限なし

私はきっと強制だらうな。武器なしならば特に。

「私、時田、玲、クロエ、アイリスの五人でいくわ。異議は認めない

「アイリスより一馬のほうがよくなのか？」

「はあ……玲、あなたは時々私をがっかりさせるわね」

「む、失礼な奴め」

わざとらしく額に手を当てて溜め息をつく由紀。このようにして、身振り手振りが多いのはいまにはじまつたことではないので突っ込まないが。

「アイリスに失礼でしょ?」

「……すまない。確かにそうだ」

子供ではあるが、彼女も仲間で対等な関係であることに変わりない。

「『めんな、アイリス』

「えへー、きにしないよー。えい!ー」

掛け声とともにアイリスが飛びついてきたので受け止める。

私の背丈の半分もないこの子は、大変無邪氣で可愛らしい。

親のような気分で接していた。

「ありがとうな、お詫びの印に後でお菓子を作つてプレゼントさせてくれ」

「わーい!」

以前作ったキャラメルにアーモンドを混ぜたお菓子を彼女が大変気

に入ってくれたので、何かについてはプレゼントしている。

そのたびに笑顔で「おにしぃ」と言つてくれるのがとても嬉しい。

「場所はいつもの川、集合時間は正午、もし遅れたら私から心のこもった蹴りを進呈させてもらひうわ、解散！」

卷之二

「おれたぐひの町に向かう」とつぶやく。

ただその前に家に帰る必要がある。

家がある場所に川とは真逆方向なので、そがなにれは

アップも兼ねた家までのランニング。大学からそこまで距離があるわけではない。

家から必要物を持って川へと急ぐ。

次の門を曲がると土手に出る。そんなど「N」でみてしまった。人が倒れているのを。

「どうなんだ？」

慌てるよりも落ち着いて対処するのがよい。

例えこの世界で死んでも生き返る。それどころか病気も怪我も完治するが、それでもほつとく気にはなれない。

痛いだとなんとか感じてる間は苦しいから。

「胸が……痛いの」

病院はない。

私には医療知識がない。簡単な怪我の処置はできるが、病気だとどうしようもない。

「分かった、とつあえずここにじや冷えるからどこかに運ぶぞ」

大学には設備があつて安心できるが、ここから大学まではかなり距離がある。

私の家に運ぶことにしてや。

「少し辛抱な」

私に背負われる彼に断つてから全力で走り出す。

できるだけ揺れないように配慮はしているが、少しは我慢頑張つ。

呻きが聞こえた。ちらりと顔を窺うと田を開じて苦しそうにしている。

「う……」

声をかけても返事はない。気を失つているようだ。

家に着いた。早々にベッドに横にする。

苦痛でだらうか、顔を歪め、胸の辺りを手で押さえ、左右に身をよじる。

「汗だくだな……」

代えの服はないが、このままでは体が冷えてしまつ。

嫌だらうが、私の服で我慢してもいいやつ。

服を脱がしにかかる。

そして、上着を脱がしたあたりで気づく。

……女。

よく顔を見れば雰囲氣も女性らしく。

色々、迂闊であった。

「ままで、つてか」

下着は脱がさず、樂そうなシャツとズボンを着せる。

すこし落ち着いたのか、先ほどよりも顔色はよい。

「悪い、そろそろ時間だ

お粥を作り、彼女の近くに置いた。

聞こえていないだらうが、彼女にそう残し、家を離れた。

川までは全力で走つて五分。

ちなみにあと三分で正午だ。

おかしいな、時間が足らないや。

「これには理由があつてだな」

「とーう」

突然、風景が遠のいた。由紀のドロップキックが私に炸裂したのだ。

こんなこと前になかつたろうか。

「……つたたた」

「聞きましょう」

「いやいいです」めんなさい

「さて、試合は一対一で、川の中州で行われるわ。で、今は曇りだけど、雨が振り出したら流される覚悟しといてね」

「んな覚悟したくないですよー。」

「時田は一番最初だから大丈夫よ、多分」

「ええー?」

「やつれど」「付けなれど」

「結構な勢いのむちやぶりですよね……」

溜め息をつきつつ、中州へ渡る時田。

お相手は……。

「えとねか」

「時田」

魔法使い同士のバトルだ。これは見ものである。

「じやあ審判は私がしようかしら」

由紀が叫ぶ。

対岸に並ぶ相手方もとくに異議はないようだ。

「武器なし、ただし物理的に使わない限りはよしとする。勝利条件は相手の気絶のみ。時間制限なし。バトルスタート……」

命運とともにとどろきが駆ける。対して時田はそこから動かない。

「我は空。器である。この体は常に満たされず、常に彼の者の傀儡なり」

「なつ……」

何かに驚くやうとなさん。

今の単語の訳は『無効』やとねさんの魔法をつりかしたのだらつか。

「Hast - Re : speーー」

勢いの止まりぬやとねさんに、正面に蹴りを突き出す時田。手で受け止めるが、更に時田は足を上げ、踵落としの要領でやとねさんを攻撃する。

「相殺せよ、風」

やとねさんが唱えた瞬間、突風が吹いた。

そして、時田とやとねさんの間が一瞬、陽炎のよひに呑む。

やとねさんの一撃いれぬまま、後ろへ下がる時田。

「空氣の層？ そんなもの、どれだけの大気を圧縮したんだよ。今吹いた風程度じゃ集まらないだろ？」

「わあ、びつしたんでしょ。あなたこそ、人の魔法を奪うなんて技、驚きました」

「やや、種あかすじや、無効にしたあと『ペー』しただけだつて」

「簡単で無い」とじゃないでしょ」

「どうかな」

「我が名はさとね。应えよ、我と同じ真名をもつもの。我が意志、
我が想い、仇なす者は目前の敵のみ。

王の名はさとね。付き従う者はおらず、ただ一人あるのみ。故に我
が世界の理は我。唯一にして無二の王」

時田の授業2

魔法とは、魔力という膨大すぎるエネルギーを形にする秘技。

その力变幻自在。

形をもたぬ、言わば万能の素材。

技法は無限。

魔法における知識とは、型であり、決まった方法はない。

最高の魔法使い。

世界の魔力を自分のタンクとして使える。

内に宿す力は無に等しくも、無限にある力を行使できる唯一の存在。

無尽蔵。

魔力が世界一なのだ。

敗北を知らうはずがない。

「君が時田妖君かい？」

「誰だ貴様」

「なーに、わしはただの最強の魔法使いよ」

「さつ、最強？　面白いね」

「誉めるな誉めるな。照れるだろ」

「ああ？　女、俺になにか用か？」

「なに、君の友達にならうかとね」

「友達い？？　馬鹿じやねえの？？」

「なんだとてめえ、わしはこれでも成績良かつたんだぞ！」

「はあ」

「ど」へへへ

「帰る」

自分で理論を創り、頭の中以外で再現する。

誰でも使える。

子供の遊び。

「……またあんたか」

「友達の名前くらい呼んでくれよ」

「こつ友達になつた」

「出合つた口だろ？　おかしなこと話を聞く

「はあ

必要なのは、

「歸庄！」

「お前も来るか？」

「俺は……」

「ふつゝ、迷つだけの未練があるな」せりてこみ

「俺はあなたと居たい！　ずっと居たい！　好きなんだよ！　少し
年上つてだけで氣取るなー　友達なんだろー！」

「はは……滅茶苦茶だぞ。わしもな、妖と……」

「へやつたれ！…」

頭がぐりぐりとして気持ちが悪い。

瞼が重い。

倒れないようじうじうながら、よつやつと目を開く。

眩しい。

外だろうか。

頭はまだはつきりしない。

「玲先輩、『めんなさい』

「いつた！！」

右頬にひりひりとした痛みが走る。張り手？

「いてえよ！ 時田！」

「謝ったじゃないすか」

「なんだよいきなり……あら

足の力が抜け、私はその場にへたり込んでしまう。

「あれ？」

「立てないと思いますよ」

「力入んねー」

実際は喋るのにすら違和感がある。

「頭に負荷がかってたんで、その副作用です。一過性のものでし
で一時間もしたらなおるでしょう」

「わづか、じゃいいや」

入り切らない力を完璧に抜いて、その場に大の字で寝転がる。

気づけば夕方だ。

空は夕焼け色に染まり、一番星が輝いていた。昼間暖かつたが、い
まは肌寒い。

私を見習つてか、時田も寝転がつた。

少しだけ間を開け、同じ空を見上げる。

「つかれたーーー！」

「なにをしたんだ？」

「先輩の世界のインターネットを日々使わせてもらひついぢゃないっす
か」

「んあ？ ああ

「DQNとか、リア充とか、それで覚えたんすけど……ってこ
れは余談でした。P2Pの技術はわかりますよね？」

「共有ソフトのあれが、わかるぞ」

「シーダーとかリーチャーとか、ようは大元のデータを持つて
る人から小さなデータをうけとり、受け取った人がさらに配る。そ
うして高速に共有が可能になってるわけですが」

「ああ」

「一人でP2Pやつたようなもんです。ちゃんと、魔法の知識ある
でしょ？」

意味が分からない。

だが、よく考えると魔法がなんであるかが理解できる。

先ほども魔法か。

「どちらかといふと同期って感じだがな……」

「あー、なんといいますか、これ大人数でもできるんすよ。そのと
きの方法がP2Pと同じでして、ただ……」

「ただ？」

「すいません、処理に必要な演算を先輩の頭使ってやりました。つ
いでにいえば先輩の知識とか流れてきたんでほぼシンクロナイズで
す」

「ああなるほど」

「あれ、怒らないんすか？ 先輩の記憶を覗いたよつむもんのこ」

「知識は共有したほうがここからな。そしてお前の記憶もみたぞ」

「あれダニーです」

「歯を食こしぶれ」

「やや、怒りないでくだせこよ」

「と、理論は組み立ててみたがどうあるんだ？」

「はー？」

「自分で理論を組み立て使うんだべ。」

「はあ……まあ」

「使つてみたいんだが」

「え？ もう組み上げたんすか？ 自分で決める自由だとは言つても矛盾があると使えませんよ。俺でも一年はかかりました」

「いや、綻びは多分なこと思ひのだが」

「じゃあ使つてみるとこことおもこまか。無理だと思ひカビ」

息を吸い。

そうだ。自分を回復してみよう。条件は当てはまつてこる。

意識を集中する。現実と完全に同調しなければ奇跡は起こせない。

一度だけ、自分の世界を空にすると、一気に自分の世界をこの世界に押し付ける。

染め上げる。塗り替える。組み替える。入れ替える。作り替える。

「言葉には制限がないなら」

無常な数字の流れ。

数多、無限といえる膨大な数字の変化。

その中から指定する。

自身を。

一番変動幅の大きなものの数値を書き換える。

暗転。

刹那の間。

それは齟齬を噛み合わせるのに要する時間。

「よひー。」

体が楽になった。

むしろいつもより快調だらうか。

アップの後のよつな感覚だ。

「え？　え？」

驚きでであるうか、時田が目を丸くする。

それはそつか、詠唱した様子が私にはなかつたのだから。

「せつきの『言葉には制限がないなら』が詠唱……??」

「せつ。会話中でも術式を組めるぞ」

「あんた天才だよ……いや、感動した。師匠や俺並、それ以上かも
しれない」

「この方法使つてみるか？」

「いえ、他人の技法は理解仕切れないんで同じ展開はむりですよ」

「ああ……」

彼女の流儀1

「不思議空間 k t k 」

二人の周りを闇が包み込む。ドーム状の大きな黒い塊が現れた。半径はぞれつと十メートルはあるつか。

外からは何も窺い見ることはできない。中はどうなっているのだろうか。

幸い声は聞こえるのだが。

「時田、あなたとは因縁があります。今日は決着をつける機会がもてて光栄です」

「肩肘張った人が苦手な件」

「本気でお願いしますよ」

「働きたくないで」「ぞれぬー 絶対に働きたくないで」「ぞれぬーーー」

「こきます」

「なんだか俺、ネタ的に孤立するよな」

「”詠唱”を”高速化”」

「”空気”を”圧縮”」

「……」

「 “空気” よ “叩け” 」

時田の呻きが聞こえる。何があったのか。

仲間達も心配そうに黒い玉を見つめていた。

「 A……」

「 “魔法” を “停止” 」

「 ……id . あらま、発動しないや。わかつたわかつた」

「 “魔法” を “蓄積” 」

「 Ready 」

「 血の代償は契約の証。ならば汝は応える義務を有する。濶みの世界より来たれ」

「 …… parallel world 」

「 内包するは深淵なる闇。彼の者は生を望み、それを差し出す。王との契約は絶対」

「 3 」

「 我は力の空蝉。故に虚構の力を行使する」

「 2 」

「宴は続く。旅人は足を止め、美しい様に心を奪われよう」

「1」

「”時田妖の魔法”を”無効”」

「0」

「じゃ、まあ、俺の勝ち」

「なにを……」

黒い塊が弾け、二人の姿が見えた。

どうなつてているのか。

「なぜ?！」

目を丸くし、心底驚いた風に声を上げる、さとなさん。

「すごいすごい。世界創造の能力か。以前会った時はそんなことできなかつたよな？ やっぱりコミットがないから？」

「煩わしい……煩わしい……」

「怒らない怒らない。まだまだ修行すればいいだろ?」

「私は、あなたのような天才ではないんです。道具に頼り、時間をかけて策を練つても容易くうち碎かれる。そんな才知溢れるあなた方が心底腹立たしい」

「む」

「しかし、如何なる天才でも努力をしてない者はいないでしょう。天才の一時間が凡才の百時間に相当しようとも、私は諦めたりしません」

「そうかい。頑張んな」

時田にしては眞面目な物言いだった。

それからの時田は一切のおふざけを排したように、恐ろしく圧倒的であつた。普段、全く力を入れていないとしか思えない。

時田はさとねさんのすべての技の原理や効果を見破り、その上でそれを完全な形で無効にし、自分の技を披露する。

わざと後手に回り、すべてを見抜く。それが時田の戦法だ。

そう。数分の間に決着はついた。

最後は魔法で眠らされた。

「ただいまっす」

「いつもあれくらい力入れて生きりよ」

「だが断る」

「……いいんだがね」

「玲、出番」

「おひ」

川に足を踏み入れると、とても冷たかった。体温を取り戻そうと無意識に身を震わした。

中洲へと渡り、相手の到着を待つ。

まもなく相手方からもひとりが踏み出した。

悪寒がした。

田の前を歩くものが、その足を踏み出す度に。

身じろぎひとつ許されないような緊張感。

理屈などなく、怖いと感じた。

気持ち悪い。吐き気を覚え、口元を押さえた。

この感覚は何だらつか。私は経験したことがない。

「ははは、いえー」

「ルールは同じよ。じゃあ始め！！」

「おえ」

由紀の図面、しかし踏み出せない。前に動くのが怖い。

手が読めない。

「あ……な、たは……あき……り、？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0062p/>

素晴らしい、自由な世界

2011年1月29日11時16分発行